

国

語

(  
解答  
番号

1

}

49

(

I 次の文章を読んで、あとの問い(問1～6【マークシート式】の解答用紙・問7～11【記述式】の解答用紙)に答えなさい。解答番号は、

1
---

 ～ 

31
----

 【マークシート式】・問7～11【記述式】。《配点65》

東京オリンピック・パラリンピックをきっかけに、日本には多くの外国人観光客がやってくると期待され、観光はたいへん盛りあがっていた。だが、期待通りにはいかなかった。パンデミックで世界中の観光がストップし、他方で、カンセン<sup>1</sup>の危険が残っているのに、経済や政治のために観光が解禁・推進され、観光が非難されることすらあった。

そもそも観光は、観光客が集まりすぎるオーバーツーリズムや、観光公害などの社会問題をつぎつぎに生み出していた。観光客はくるのに地域の経済はなかなか活性化してくれない、地域はそんな「失敗例」にならないように、政府に補助金をもらうための書類作成に追われ、疲れきっている。東京などの大都市では、富裕層の訪日外国人をターゲットにした政策が数多く実行され、不動産価格がコウトウ<sup>2</sup>し、投資家は多くの富を手にした。都市は金持ちのための空間になりつつある。その一方で、観光産業では非正規雇用が進み、雇用が悪化している。

「観光立国」や「地方創生」のかけ声のもと、地域の人びとには、観光を活性化させる「自助努力」が求められてきた。だが、それで地域や社会は本当に豊かになったのだろうか。観光の影で、多くの人びとが損しているのではないか。

現代の観光は矛盾に満ちている。

その背景にあるのは、社会そのものの矛盾である。

資本主義やグローバリゼーションのゲキカ<sup>3</sup>、日本経済の悪化、人口減少と地方の衰退、自治体の財政難、超高齢社会、安定雇用の崩壊、新自由主義のテツテイ<sup>4</sup>と限界――。観光の問題は、矛盾に満ちて無理のある、現代社会の問題と結びついている。

私たちは観光を、社会のあり方とともに問い直さねばならない。現代の観光は、グローバル化と人口減少の時代に、あらゆる地域に自力での経済活性化を求め、東京などの大都市では、ひたすらに投資で利潤を追求する社会状況を象徴している。

ならば、これから私たちは、どんな観光をめざせばよいのだろうか。

観光は、まだまだ大きな可能性を秘めている。私たちは観光の価値の多様性を尊重すれば、真に豊かな社会をめざせると思う。観光の可能性は、社会の未来にもつながる。矛盾に満ちた観光の、社会の可能性を探っていこう。

観光は日本に残された、数少ない成長産業である。日本は地域をあげて、観光による経済発展をめざすべきである。「観光立国」こそ、地域の再生、「地方創生」の要である――。

よく見られる言説である。政府のステートメントにもある。左は、観光庁の「観光立国推進基本計画」の抜粋である。

この先、人口が減り、少子高齢化が進む中、我が国が目指すべきは交流人口の拡大である。観光産業の裾野は極めて広く、大きな経済波及効果を有する総合産業と言い得るものであり、そのポテンシャルは限りなく大きいと考えられる。このため、観光産業を我が国の基幹産業へと成長させていく。

経済のグローバル化と人口減少は、日本の国力を大きく損なっているとされる。「ものづくり大国・日本」を支えた製造業はグローバルなコストダウン競争にさらされ、工場を発展途上国や新興国に移転させていった。日本から基幹産業と、安定した働き口が失われている。

人口減少はその結果にして原因であり、加速装置である。安定した生活が約束されなくなった日本では少子化が進んだ。人口が少なくなれば日本という「市場」が小さくなり、日本で物を作って売る意味も小さくなる。よって、さらに産業が衰退し、人口も減る。衰退国家の負のスパイラルである。

観光が、そこに一筋の光をもたらす。

人がいないなら、外からきてもらえばいい。ものづくりではなく、人を生かした産業を興せばいい。観光という「稼げる」産業を育てて、地域に雇用の場を確保しよう。観光は、宿泊業や旅行業といった、観光産業だけでなく、交通機関や、地域の小売店、飲食店、さらには農業や漁業といった、さまざまな産業に関わる総合産業である。だから、訪日外国人や、東京など大都市

からの観光客をたくさん集めれば、地域の経済は活性化できる。

——こうした主張は、政府や自治体の観光政策だけでなく、シキシヤ<sup>5</sup>による観光論から人びとのSNSへの書きこみに至るまで、さまざまな場で見られた。

日本はまさしく、「観光立国」の時代に突入していた。

二〇〇七年に観光立国推進基本法が施行され、「観光立国」は、日本の国家戦略とされた。世界的な国際観光の広がりや背景に、訪日外国人を誘致し、お金をつかってもらうために、さまざまな施策が行われてきた。たとえば二〇一五年には、一九七〇年から四十五年ぶりに、訪日外客数が出国日本人数を超えた。それだけ日本が、訪れるに足る、魅力のある国になったとも言える。

ある時期には、少なくとも日本の著名な観光地では、訪日外国人と思われる人びとを目にしない日はなかった。どこに行っても、日本という国を、外国人たちがマンキツ<sup>6</sup>していた。それはそれなりにすばらしい光景だった。

訪日外国人から人気を得たビジネスは、外国人に和服を着せ、人力車に乗ってもらい、日本らしい土産物を買ってもらい……という「伝統的な日本」をアピールするものだけではない。コスプレして東京の都心をカートで走ることが流行ったり、ハートマークが描かれた日本のファッションブランドのTシャツが人気を博したり、あるいは日本のブランドではないはずのナイキやアディダスのスニーカーショップがなぜか人気になったり、スキー場が外国人に運営されるようになったり……。こうしたことも、「観光立国」という政策の影響がいかに広いかを意味していよう。

観光への期待の核にあるのは、そうした観光の「裾野」の広さである。

観光は、旅行業や宿泊業といった狭い意味での観光産業だけで成り立っているわけではない。観光地に行くには交通機関をつかうし、観光地に着いたら、食事をしたり、おみやげを買ったりする。宿でも夕食が出るが、その食材や調理設備を提供する会社もある。ベッドのシーツはクリーニング会社が、客室や浴場は、清掃業者がきれいにする。マスメディアやSNSは、観光地のプロモーション産業として観光に関わっている。じつに多様な産業が観光を支えている。

ある消費者が観光地に滞在する経済効果は、観光に直接関係するとは限らない「裾野」の、さまざまな産業にも広く波及すると考えられている。観光庁の試算では、観光の経済効果は四・一兆円で、GDPの〇・八％に達するとされた。国土交通省も、「賑わいの創出、雇用の創出、経済の活性化等観光のもたらすメリットは大きく、観光はまさに『地方創生』の切り札となっている」と、観光の経済的なメリットを強調し、観光へおいに期待していた。幅広い経済活性化のトリガーになる観光は、地域や日本の救世主とされた。

製造業や農林水産業など、いろいろな産業が衰退している地方の地域や行政にとって、観光による経済活性化の可能性は、「裾野」が広いため魅力的である。仮に、ある自治体でさまざまな産業や地域のひとつひとつに補助金や優遇措置などの施策を手あてしたら、どれだけ財源があってもきりがない。しかし観光にしばって活性化させれば、それを入り口にして自治体のさまざまな産業や地域が再生されるという、魅力的なストーリーを描ける。

もし単純に税金を投入して、農業や製造業、あるいは中心商店街などを再生しようとすれば、有権者から「特別扱いだ」と反発されるおそれがある。たとえば、衰退している中心商店街を税金で再生しようとすれば、ほかの地域の住民から反発が起きかねない。りんご農家を保護すれば、ほかの産業や稲作農家は違和感を持つ。

これらを観光地化させて、商店街の来訪者数や、りんご狩りの観光農園の売上が、前年比で二〇〇％増加といった「実績」があれば、補助金として税金を投入する名目が立つ。これだけたくさんの人がきた、これだけの経済効果があった、だからこの地域や産業は、税金で再生するにふさわしいではないか。そう言えてしまえる。逆に実績が出なければ、スムーズに補助金をカットできる。人気の場所や産業は、税金を集中させ「残すに値する」価値があると評価しやすい。

現代社会は、こうして「客観的な価値」があると言えないものには、税金を出せないような段階にきているのかもしれない。いずれにせよ観光による活性化には、特定の部門や地域に税金を出す・出さないの判断を、アリの的に正当化できる力がある。

「選択と集中」の時代において、観光による経済活性化は、とても理にかなっている。  
乙 観光による地域経済の活性化は、どうすれば達成できるのだろうか。

それを論じた議論は、それこそ山のようにある。観光研究者から企業経営者、コンサルタント、メディア関係者など、かなりさまざまな方面が、活性化の方法を論じてきた。基本的には、地方の地域の住民や行政、企業などに対して、地域の雇用創出や経済成長のために、マーケティングなど企業経営的な方法を導入する「自助努力」が求められる。

日本は「観光大国」になるために、国内の自然や文化など、本来は経済的な価値をつけられないものを、観光のための商品として、効率的に稼げる産業にする必要がある。まだ商品化されていないものを、観光のために商品にしてしまえばよい。文化財はもはや税金で保護されるべきものではなく、「文化財を単に税金を費やす『研究・教育』の場から、『自ら稼げる観光施設』に生まれ変わらせることで、自分たちで稼いでお金で、施設のメンテナンスや伝統文化の普及などを進めていくのです」と主張している論者も存在する。

自分に必要な金は自分で稼ぐべきだ。それは文化財や自然、スポーツなども例外ではない。みんな「自助努力」すべきだ。努力して成功したものが、金や地位を得るべきである。とても【a】である。

観光のもうひとつの経済的特質として、観光は、地域の努力や工夫による活性化の【b】が大きいと考えられている。

観光地の経済的価値は、寺や神社、自然環境、その背景にある文化や歴史といった、本来は価値をお金に換算できない財からも成り立っている。こうした財を経済学で「自由財」と呼ぶ。

自由財の経済価値はだれにも決められない。だれにも決められないということは、【c】の工夫しだいで、原理的にはいくらでも高められる。

家の裏の森と白神山地の森は、植生などは全然違うかもしれないが、いずれも自由財として見れば、おなじ「森」である。森だが、日本初の世界自然遺産であることや、ブナの原生林が国内最大規模であるといった記号的な価値が、白神山地の経済価値を高めている。「これはこういうものなのです」という【c】やストーリーは、観光地の経済的価値を高めるのである。観光で地域のブランディングが必要とされる根本理由は、ここにある。

これは観光地にとっては、経済発展の希望である。わかりやすい観光資源や、人口や交通条件に恵まれていない地域でも、自

分たちの【c】の工夫次第でなんとかなる、ということになる。

だが同時にそれは、「自力でなんとかしなければならぬ」とされてしまう、諸刃の剣でもある。「『やる』という覚悟を決めるか決めないか、それだけ」と言われてしまうのは、観光の活性化は「自力でなんとかできてしまう」からでもある。観光の可能性は、逆説的に、地域に **X** を強いることがある。

では、観光で経済を活性化する手法はどのようなものか。これもさまざまな主張がある。たとえば、富裕層を中心とした訪日外国人客のさらなる受け入れ、地域運営へのマーケティングやマネジメント手法の導入、それによる場所・地域のブランディング戦略などがある。

もし観光客がくるだけで、一円もお金をつかわなかったら、地域にとっては経済的になんの意味もない。混雑して迷惑だし、道や駅を歩く人が増えればその分、道も駅も劣化する。人がくるだけ経済的に損である。困るのは地域住民である。

したがって観光客の数はできるだけ少ない方がよく、その消費額は多い方がよい。そして日本の人口は減少の一途である。ならば少数の外国人富裕層を誘致して、その人びとから効率的に多額の観光消費を引き出すべきである。理屈で言えば合理的である。

だが、その理屈が、観光の矛盾も生み出している。

日本でも、経済優先の観光に対する違和感や批判は少なくない。訪日外国人客の観光消費を増やそうという活性化論への批判もある。実際、近年ではそうした経済優先の観光が、オーバーツーリズムや観光公害といった、地域のキャパシティを超えて観光客が訪れることによる社会問題を生じていることも、よく知られている。

観光の副作用は【d】に渡る。観光はさまざまな産業が関わって「裾野」が広いのだから、副作用も大きくなるのは当然である。

観光による経済の活性化は、逆に経済を衰退させる危険がある。経済を重視しすぎた観光は、短期的には地域を「高級化」して利益を生むかもしれないが、中長期的には地域の個性を弱め、生活の質を低下させてしまうと考えられている。観光の逆説であ

る。

問題は都市に限ったことではないが、経済の活性化のために、地域が「外からきた人がお金をつかって楽しむ場所」「外から投資をして儲ける場所」に変わっていくのは、観光のひとつの現実である。

すると、ここでいくつかの疑問がでてくる。観光で得をしているのは、金持ちの観光客や投資家ではないか。それなら観光客や投資家はその地域を責任を持って守れるのだろうか。震災や豪雨といった災害に襲われたり、高齢化がさらに進んで地域住民の生活が難しくなった時に、どれだけ観光客や投資家が、地域の共助に参加できるのだろうか。地域住民たちはなぜ、オーパーツリズムなどで損しなければならぬのか。地域は、だれのものなのか。これらは、観光による地域活性化をめぐる

Y

である。

観光による経済活性化にさまざまな

Y

があることは、幾重にも論じられてきた。

近年はそれを一因として、もう一方では地域の人口減少を要因として、観光を超えた「関係人口」も注目されている。観光客を意味する「交流人口」が国土交通省のキーワードなのに対して、「関係人口」は人口や地方自治を扱う総務省のイチオシである。

A

な人口減少のなかでは、すべての地域が定住人口を確保するのは難しい。かといって、観光客を集めてもいろいろな問題があるし、観光客では地域の問題を解決する主体にはならない。ならば、地域のメンバーになりうる人を、  
せよ他の地域からつれてくればよい——。それが「関係人口」論である。

B

に

では、関係人口になりうるのどのような人か。

ある調査では、「地域への関係意欲」が高い人は、地元産品の購入意欲や地元での就業意向、地域の選挙への投票意欲が高く、困窮者への支援意向が強く、学ぶ意欲と多様性の尊重に秀でているという。万能人物である。

たしかに、こうした人物は地域社会の問題解決に欠かせない存在になろう。それゆえに確保も難しい。そのため関係人口論では、  
C

C

なマーケティング手法を応用した地域のアピールや「シティプロモーション」が必要だとされる。そして関係人口

を得るには政策も大事だが、結局は地域住民が主体となるべきで、「地域のまとめ役となる人は、そのことを忘れてはいけない」

と釘を刺される。

こうした言説において、地域住民はいつも苦勞を強いられる側である。地域に大変な「自助努力」が求められるのは、関係人口論でも変わらない。

あるいは、有為な関係人口を得るのは難しいので、地域に深くコミットしてくれなくても、とにかく地域に「関係」してくれる人物を確保するのが重要という見方もある。「ハードルを下げ、人との関わりの回路が広がる。そうやって関わるうちに、中には **D** に、移住して定住するという可能性もあるでしょう」という見解もある。

**Z** 観測である。科学的なマーケティング手法を導入して地域をアピールする努力の先に「可能性もあるでしょう」では、地域の人びとは、いつ報われるのだろうか。

他にも、建築やアートを活用した地域の活性化によって、多様な人びとが集まって地域社会の問題を解決できるという議論も少なくない。

こうした議論では、老朽化した公共施設や街並みをアートで美化して、アート活動の拠点とすることで、そこに人びとが集まってにぎわいが生まれ、地域の活気が再生したという事例が、全国からたくさん集められる。アート活動に関わるのは、人びとの生きがいにもなるという。

こうした議論の主張は「アート」という題材の性質上しかたないとはいえ、えてして希望的で抽象的である。

筆者はアートそのものの価値は否定しないし、自身も、地域社会とアートのプロジェクトに関わっている。だがそれゆえに、**E** な価値はべつとしても、十分な交流・関係・定住人口の獲得や経済効果などの現実性には **F** にならざるを得ない。

近年のまちづくり論では、これからは「非地位財型幸福」を高めるべきという主張もある。

「非地位財型幸福」とはお金やモノ、地位などが手に入る「地位財型幸福」とは異なり、「やってみよう。自己実現と成長」がありがとう。つながりと感動「あなたらしく。独立とマイペース」なんとかなる。前向きと楽観の四つからなるという。それらが

大切なのはだれでも知っているが、それでどうやって【 e 】すればよいのだろうか。

へ あ へ、経済的な豊かさは望めないから「地域を維持できるだけの最小限の豊かさでよい」といった「ちいさな経済」論や「脱成長」論も【 f 】される。

へ い へ、東京や大都市、あるいは中国やインドなど経済発展している国が存在している以上、「脱成長」は、そこからおいでいかれる「衰退」とイコールである。現状維持を目指すには、経済発展しなければならない。

地域の電気ガス水道といったインフラや自然環境の整備にも、お金が必要である。というか、へ う へ観光で稼ごうというのが観光政策論ではなかったか。

私たちは現実として、経済的な豊かさがなければ生きていけない。地域の維持にも、一定の経済的な豊かさが絶対に必要である。「脱成長」したら、そうした地域で暮らす人びとの生活はどうなるのだろうか。

ものごとには順序がある。もし本当に「脱成長」をめざすなら、前提として少なくとも必要なのは、東京などできわめて強力に稼げる産業を育てることと、そこで稼いだお金を、財源と権限ともに地方に再分配する制度を精緻に設計することである。だが、こうしたやり方は **G** に難しく、多くの矛盾を抱えてもいる。

言うまでもなく、現時点の日本経済が低調で、へ え へ「東京一極集中」を強めながら地方が衰退しているのは、右の前提が成立していないことを意味している。だから、いまのままで地域が「脱成長」をめざしても、経済的・財政的には「衰退の加速」に止まらず、地域のインフラや自然環境は、物理的に崩壊していく。

農山村には、雇用の場がちゃんとある。ただし賃金はよくない。そうした職を選ばないのは、人びとが「貨幣経済的価値に偏重した視点」を持っているからだ。——これは、それなりに事実であろう。事実だから困る。ではどうすればよいのだろうか。若い世代を中心として、何らかの方法でみずからの価値観を転換して、賃金のよくない職を選んでほしいということになるのだろうか。

では、どうやって、価値観を変えるのか。それも若い世代が自分で変えればいいのか。へ お へ、仮に若い世代が価値観を変

えて、経済的な豊かさを優先しない人生を選んだとして、「非・経済的な豊かさ」が将来にわたって、経済的な豊かさよりも本当に優先して重要なのだと、だれが保証してくれるのだろうか。

へ か 金融庁は、老後に二千万円の資産が必要だから、これから国民にはそれぞれ投資するなりしてしっかり蓄財してもらおうという趣旨のレポートを発表し、物議を醸した。筆者が七〇代になる頃の日本を想像すれば、二千万円「程度」の資産で安心して老後生活ができるとは思えないのだが、「非・経済的に豊か」な地域に移住したとして、この二千万円はどうすればいいのか。地方の地域ではそれも要らないのだろうか。

あるいは、若くしてそれくらいのお金はとくに用意している「稼ぐ力」のある人だけが、関係人口として地域で活躍すればよいのだろうか。そうかもしれない。「お荷物」な定住者は不要とし、地域に役立つ有為の人物を欲しがる関係人口論が【g】するのは、その結論である。

現代のふつうの若い世代にとって、最大の経済リスクは老後の資金である。しかもこれは中産階級の崩壊が進んでいる先進各国では共通の問題である。もう稼ぎきった高齢者ならともかく、日本の経済や地域社会を担っていく、これからお金が必要な若い世代にとって、こうした主張ははたしてどれだけ受け入れられるのだろうか。受け入れてしまつて、安全なのだろうか。

筆者は、ここまでで紹介してきた考え方を否定しているわけではない。「非・経済的な豊かさ」論も含めて、それを望む人もいるし、またこの文章で紹介してきた事業は、それぞれの地域や人びとにとっては重要な意味があり、それで救われる人びとがいる。それは【h】たる事実だし、そうしたローカルな実践に向き合う人びとに、筆者もフィールドワークをやってきた人間として敬意を抱いている。またそれぞれの論者もまた、筆者と同様あるいはそれ以上の敬意を持っていることも、想像できているつもりである。

だが、こうした敬意の一方でどうしても拭い去れないのが、問題の巨大さに対して、それぞれの解決策があまりにもミクロではないかという疑問である。

観光をめぐる地域活性化の方法論は結局、関係人口論を含めて、グローバル化や大都市への経済活動や人口の過集中、基幹産

業の衰退、A な人口減少と超高齢社会化といった、先進国に共通の巨大な構造的問題に対して、個々の地域の人びとのささやかな努力と工夫で、ある程度の対応ができていくとか、対応できるかもしれない、という話ではないだろうか。

G な問題はスルーされた上で、H な対応が繰り返しかえされていく。そしてG な問題が解決されないの  
で、地域の人びとはH な対応をさらに繰り返しかえし「自助努力」で疲弊してゆく。

(福井一喜『無理しない』観光 価値と多様性の再発見』より、一部改変)

問1 1～6を漢字で書いた時に含まれる漢字として最も適当なものを、次の①～⑧のうちから、それぞれ一つずつ

- 選びなさい。解答番号は、1
- |      |      |      |     |      |      |   |
|------|------|------|-----|------|------|---|
| 6    | 5    | 4    | 3   | 2    | 1    | 1 |
| マンキツ | シキシヤ | テツテイ | ゲキカ | コウトウ | カンセン | 冠 |
| ①    | ①    | ①    | ①   | ①    | ①    | 2 |
| 万    | 式    | 定    | 加   | 好    | 刊    | 戦 |
| ②    | ②    | ②    | ②   | ②    | ②    | 3 |
| 吉    | 織    | 訂    | 下   | 公    | 冠    | 線 |
| ③    | ③    | ③    | ③   | ③    | ③    | 4 |
| 詰    | 社    | 鉄    | 劇   | 高    | 戦    | 4 |
| ④    | ④    | ④    | ④   | ④    | ④    | 5 |
| 満    | 写    | 哲    | 激   | 当    | 線    | 5 |
| ⑤    | ⑤    | ⑤    | ⑤   | ⑤    | ⑤    | 6 |
| 漫    | 捨    | 低    | 花   | 頭    | 選    | 6 |
| ⑥    | ⑥    | ⑥    | ⑥   | ⑥    | ⑥    | 7 |
| 生    | 謝    | 停    | 火   | 投    | 幹    | 7 |
| ⑦    | ⑦    | ⑦    | ⑦   | ⑦    | ⑦    | 8 |
| 緊    | 色    | 底    | 撃   | 答    | 染    | 8 |
| ⑧    | ⑧    | ⑧    | ⑧   | ⑧    | ⑧    |   |
| 慢    | 識    | 貞    | 可   | 盗    | 観    |   |

問2 本文中の「 $\alpha$ 「観光は、地域や日本の救世主とされた」と述べている理由について、本文で述べられている内容と一致しないものを、次の①～⑤のうちから、一つ選びなさい。解答番号は、7。

① 観光地における、さまざまな「実績」によって、補助金などの税金投入の「選択と集中」をスムーズに行うことができるようになるから。

② 観光産業が発展すると、地域を訪れる人が増加することになり、税金を投入する意義があるから。

③ 観光産業がさかんになると、他の産業に良い影響が広がっていくから。

④ 観光産業が活性化し、収入が増加することは、地域の財源が豊かになることを意味しているから。

⑤ 観光産業は、税金の投入によって発展させてゆくことが可能だから。

問3 「a」～「h」にあてはまるものとして最も適当なものを、次の①～⑧のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。なお、同じ番号を二回以上用いてはならない。もし用いた場合には、同じ番号の解答をすべて誤答とする。

解答番号は、 a 8 b 9 c 10 d 11 e 12 f 13 g 14 h 15。

① 多岐 ② 散見 ③ 明快 ④ 演出

⑤ 厳然 ⑥ 自活 ⑦ 到達 ⑧ 余地

問4 A ～ H にあてはまるものとして最も適当なものを、次の①～⑧のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。なお、同じ番号を二回以上用いてはならない。もし用いた場合には、同じ番号の解答をすべて誤答とする。

解答番号は、 A 16 B 17 C 18 D 19 E 20 F 21 G 22 H 23。

① 根本的 ② 表面的 ③ 科学的 ④ 精神的

⑤ 懐疑的 ⑥ 長期的 ⑦ 結果的 ⑧ 一時的

問5 へあくへかくにあてはまるものとして、最も適当なものを次の①～⑥のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。なお、同じ番号を二回以上用いてはならない。もし用いた場合には、同じ番号の解答をすべて誤答とする。

解答番号は、あ  い  う  え  お  か  。

- ① 折しも      ② あるいは      ③ かつ      ④ しかしながら      ⑤ ならば      ⑥ だからこそ

問6 本文中で述べられている筆者の主張に沿ったものを、次の①～⑧のうちから、二つ選びなさい。

解答番号は   。

- ① 日本の地方で起きている、人口減少や少子化などの問題は、観光産業が発展していくだけで解決できる。  
② 地域経済の活性化のためには、経済的な価値とは関連性のない文化財を、稼げる観光施設に生まれ変わらせることが、不可欠である。

③ 関連する領域の多い観光産業を発展させることによって、地域経済の発展が必ずもたらされる。

④ 観光産業は、日本のどの地域においても、自力での地域経済活性化を達成するための原動力となり得る産業となっている。

⑤ 観光産業への期待が大きくなっているのは、それが、農業や商業など、他の産業の発展をもたらしているからである。

⑥ 私たちは、観光について、社会のあり方とともに問い直すことが必要である。

⑦ 観光目的で来日する外国人がもたらす経済効果は、日本の各地域の継続的な発展のために有効である。

⑧ 日本は、すべての地域で観光による経済発展をめざすべきである。

以下の問いは記述式の問題です。記述式解答用紙に解答しなさい。

問7 ㊦ 甲「客観的価値」と同じ意味で使われている言葉を、6ページから、漢字二字で抜き出しなさい。

問8 ㊦ 乙「地域経済の活性化」の結果、地域に生じる具体的な出来事を、7ページから漢字四字で抜き出しなさい。

問9 ㊦ X に入る最も適切な言葉を、本文中より漢字四字で抜き出しなさい。

問10 ㊦ Y には、同じ言葉が入る。㊦ Y に入るのに最も適切な言葉を、3ページから漢字二字で抜き出しなさい。

問11 ㊦ Z に入るのに最も適切な言葉を、本文中より選んで、漢字三字で抜き出しなさい。

II 次の文章を読んで、あとの問い(問1〜7【マークシート式】の解答用紙・問8〜9【記述式】の解答用紙)に答えなさい。解答番号は 32 49 【マークシート式】・問8〜9【記述式】。《配点35》

今は昔、大和の国に長者ありけり。家には山を築き、池を掘りて、いみじきことどもを尽くせり。門守りの女の、子なりける童の真福田丸といふありけり。春、池のほとりに至りて芹を摘みけるあひだに、この長者のいつき姫君、出でて遊びけるを見るに、顔かたちえもいはず。これを見てより後、この童、おほけなき心つきて、嘆きわたれど、かくとだにほのめかすべき便りもなかりければ、つひに病になりて、その事となく伏したりければ、母怪しみて、その故をあながちに問ふに、童、ありのままに語る。すべてあるべきことならねば、我が子の死なむずる事を嘆くほどに、母もまた病になりぬ。

その時、この家の女房ども、この女の宿りに遊ぶとて、入りて見るに、二人のもの病み伏せり。怪しみて問ふに、女の言ふやう、「させる病にはあらず。しかしかのことの侍るを、思ひ嘆くによりて、親子死なむとするなり」と言ふ。女房笑ひて、このよしを姫君に語りければ、あはれがりて、「やすきことなり。早く病をやめよ」と言ひければ、童も親もかしこまりて、喜びて、起き上がりて、物食ひなどして、元のやうになりぬ。

姫君言ふやう、「忍びて文など通はさむに、手書かざらむ、口惜し。手習ふべし」。童喜びて、一二日に習ひ取りつ。またいはく、「我が父母死なむこと近し。その後、何事も沙汰せさすべきに、文字習はざらむ、わろし。学問すべし」。童、また学問して、物見明かす程になりぬ。またいはく、「忍びて通はむに、童、見苦し。法師になるべし」。すなはちなりぬ。またいはく、

「その事となき法師の近づかむ、怪し。心経、大般若など誦むべし。祈りせさするやうにもてなさむ」と言ふに、言ふに従ひて誦みつ。またいはく、「なほ、いささか修行せよ。護身するやうにて近づくべし」と言へば、また修行に出で立つ。姫君あはれみて、藤袴を調じて取らす。片袴をば、姫君みづから縫ひつ。これを着て修行し歩くほどに、この姫君、はかなくわづらひて失せにけり。かくし廻りて、いつしかと帰りたるに、「姫君失せにけり」と聞くに、悲しきこと限りなし。それより道心深く起こり

ければ、ところどころ行ひ歩きて、貴き上人にてぞおはしける。名をば智光とぞ申しける。つひに往生してけり。

あとに弟子ども、後の業に、行基菩薩を導師に請じ奉りけるに、礼盤に上りて「真福田丸が藤袴、我ぞ縫ひし片袴」と言ひて、異事も言はで下り給ひにけり。弟子ども怪しみて、問ひ奉れば、「亡者智光、必ず往生すべかりし人なり。はからざるに惑ひに入りにかば、我、方便にて、かくはこしらへたるなり」とこそそのたまひれ。

(『古本説話集』より)

- (注1) 文字……文章。ここでは特に漢文のこと。
- (注2) 心経……仏教の經典のひとつ。「般若波羅蜜多心経」のこと。
- (注3) 大般若……仏教の經典のひとつ。「大般若波羅蜜多経」のこと。
- (注4) 藤袴……藤や蔦などの蔓性植物の纖維で織った布で仕立てた粗末な袴のこと。
- (注5) 片袴……僧や山伏の穿く短い袴のこと。
- (注6) 導師……法会を主になって行う僧のこと。
- (注7) 礼盤……法会の際、導師が座る座席のこと。

問1 — 線ア～エの意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。

解答番号は、ア **32**

イ **33**

ウ **34**

エ **35**。

ア「おほけなき」

① 分不相応な

② 常識のない

③ 雷に打たれたような

④ 分別のない

⑤ 夢見心地の

イ「あながちに」

① 遠慮がちに

② 無理やりに

③ それとなく

④ 根掘り葉掘り

⑤ 怒りに任せて

ウ「かしこまりて」

① 恐れおののいて

② 姿勢を正して

③ 驚き慌てて

④ 恐れ多く思つて

⑤ 嘆き悲しんで

エ「口惜し」

① みつともない

② 不本意だ

③ もつたいない

④ うらやましい

⑤ 本望だ

問2 ～～線い～ほの解釈として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。

解答番号は、い **36**

ろ **37**

は **38**

に **39**

ほ **40**。

い「いみじきこと」

① 周りを驚かせること

② 大がかりなこと

③ 極悪非道なこと

④ ぜいたくなこと

⑤ 人手の要ること

ろ 「この長者のいつき姫君」

- ① この長者の男勝りな姫君
- ② この長者の手を焼いている姫君
- ③ この長者の美しいと評判の姫君
- ④ この長者の大切に育てている姫君
- ⑤ この長者のわがままな姫君

は 「えもいはず」

- ① 言葉に出来ないほど美しい
- ② 何とも言えないほど不細工だ
- ③ 気にならないほど気立てがよい
- ④ 声を掛けられないほど気品がある
- ⑤ 絵に描けないほどかわいらしい

に 「死なむずる」

- ① 死んでしまった
- ② 死にそうになっている
- ③ 死なずにいられる
- ④ 死にたいと言う
- ⑤ 死なねばならない

ほ 「手書かざらむ」

- ① 筆を持つことが出来ないのは
- ② 字を書くのが下手なのは
- ③ 筆や硯すずりを持っていないのは
- ④ 和歌が詠めないのは
- ⑤ 文字が書けないのは

問3 — 線 A の解釈として最も適当なものを、次の ① ～ ⑤ のうちから、一つ選びなさい。解答番号は、

- ① 結婚したいなどと申し出るだけの財力もなかったのだ
- ② 姫君からは、全く脈がないことを知らせるような手紙さえ来なかったのだ
- ③ 叶かなうはずもない恋心を忘れることができるような手段もなかったのだ
- ④ 姫君からは、自分の恋心に応えてくれることをほのめかすような返事もなかったのだ
- ⑤ 恋心を抱いていることさえ、それとなく伝えられる方法もなかったのだ

41

問4 — 線B「真福田丸が藤袴、我ぞ縫ひし片袴」と言ひて」とあるが、行基菩薩がこのように言ったのはどういうことか。

その説明として、最も適当なものを、次の①～⑤のうちから、一つ選びなさい。解答番号は、

42。

① 行基菩薩は、かつて智光(真福田丸)が、恋心を寄せた長者の娘から藤袴を縫ってもらい、それを生涯大事に身に付けていたことに感銘をうけたため、弟子たちにそのことを伝えに来た。

② 行基菩薩は、かつて長者の娘が、智光(真福田丸)に藤袴を縫ってあげたことを知っており、智光が往生できたのは、長者の娘の献身的な働きかけによるものであったことを弟子たちに伝えに来た。

③ 智光(真福田丸)を往生へと導いたのは、長者の娘が縫ってくれた藤袴の不思議な力であるが、智光本人も弟子たちもそのことに気付いていないため、長者の娘は行基菩薩の姿となって伝えに来た。

④ 智光(真福田丸)に藤袴を縫ってくれた長者の娘は、実は行基菩薩の仮の姿であった。迷いの中にいた智光を往生させようと、娘の姿になって現れ、修行を勧め、往生へと導いたのであった。

⑤ 智光(真福田丸)に藤袴を縫ってくれた長者の娘は、実は行基菩薩の弟子であった。行基の指示で、迷いの中にいた智光を往生させるべく、経典を学ばせ、仏道修行の旅に出るよう導いたのであった。

問5 ……線「往生すべかりし人」について

(1) 「往生す」の活用形を、次の①～⑥のうちから、一つ選びなさい。解答番号は、

- ① 未然形
- ② 連用形
- ③ 終止形
- ④ 連体形
- ⑤ 已然形
- ⑥ 命令形

43。

(2) 「し」の活用形を、次の①～⑥のうちから、一つ選びなさい。解答番号は、

- ① 未然形
- ② 連用形
- ③ 終止形
- ④ 連体形
- ⑤ 已然形
- ⑥ 命令形

44。

(3) 解釈として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は、

- ① 往生したいとは思わなかった人
- ② 往生してしまった人
- ③ 往生できなかった人
- ④ 往生するはずだった人
- ⑤ 往生しようとしていた人

45。

問6 〰線 a ～ c の説明として適当なものを、次の ① ～ ⑥ のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。

解答番号は、 a 46、 b 47、 c 48。

- |   |          |          |                             |
|---|----------|----------|-----------------------------|
| a | ① 完了の助動詞 | ② 打消の助動詞 | ③ 推量の助動詞                    |
|   | ④ 接続助詞   | ⑤ 格助詞    | ⑥ 係助詞                       |
| b | ① 受身の助動詞 | ② 使役の助動詞 | ③ 完了の助動詞                    |
|   | ④ 係助詞    | ⑤ 終助詞    | ⑥ 格助詞                       |
| c | ① 過去の助動詞 | ② 断定の助動詞 | ③ 婉曲 <small>えん</small> の助動詞 |
|   | ④ 接続助詞   | ⑤ 間投助詞   | ⑥ 副助詞                       |

問7 本文の内容と合致するものを、次の ① ～ ⑥ のうちから、一つ選びなさい。解答番号は、 49。

- ① 真福田丸の母は、大和の国の長者の家で、長者の娘の世話係をしていた。
- ② 野原で遊ぶ長者の娘を見て以来、真福田丸もその母も、同時に病気になるって寝込んでしまった。
- ③ 長者の娘は、自分に対する真福田丸の恋心を知って、すぐに結婚した。
- ④ 長者の娘は、真福田丸に教養がないことを知ると、さまざまな勉強をさせた。
- ⑤ 長者の娘は真福田丸に、せめて格好だけでも僧侶の姿をして、周りに怪しまれないように傍そばに寄るよう言った。
- ⑥ 真福田丸は名前を智光と改めて諸国修行の旅に出たが、帰ってくると姫君の姿が忽然とつと消えていた。

以下の問いは記述式の問題です。記述式解答用紙に解答しなさい。

**問 8** この本文は、平安時代末期～鎌倉時代初期に成立したとされる説話集『古本説話集』に載るものであるが、平安時代末期に成立した、日本最大の説話集は何か。漢字五字で書きなさい。(2点)

**問 9** 〓線部を一五字以内(句読点は不要)で現代語訳しなさい。(3点)